



「夢・出会い・感謝」こそが
人生を変える



ミレニアム50号
発行記念特集

京谷 和幸

元車いす
バスケット
ボール選手

まるで体の一部であるかのように巧みに車いすを操りながら、猛スピードでパスをつなぎシュート！

車いすバスケットならではの迫力に満ちた白熱のプレーには、人間の強さと可能性の大きさを見せつけてくれるような驚きと感動があります。

今回50号を迎えた本誌ミレニアムでは、Jリーガーから車いすバスケットボール選手に転身し、さらにサッカー指導者として再びピッチに戻った不屈のアスリート、京谷和幸さんにお話しを伺いました。

わがまま、自己中、傲慢だった
サッカー選手時代

千葉県に住んで20年以上になりますが、生まれは北海道室蘭市です。小さい頃からスポーツが得意で足も速く、小学校2年生からサッカーを始め、高校は、サッカーの強豪として知られる室蘭大谷高校（現北海道大谷室蘭高校）に入学しました。1年生ですぐにレギュラーとなつて背番号「10」を付け、2年生で日本ユース代表に選出され、3年生の時にはバルセロナオリンピック代表候補にも選出されました。

全国選りすぐりの選手だけが集まる日本ユースで練習すると、個々のレベルが非常に



先輩方にとってはとんでもなく生意気で嫌な後輩だったと思います(笑)。

入社後、約1年は午前は仕事をして午後から練習するという形でサッカーをしていましたが、1991年に正式にプロ契約を交わし、子どもの頃からの念願だった『プロサッカー選手になる』という夢を叶えることができました。

否応なく訪れた 人生最大のピンチ

子どもの頃から大好きなサッカー一筋で着々と目標を実現してきたわけですが、1993年5月のJリーグ開幕を控え、「さあ、これから」という大事な時に太もも裏の肉離れを起こしてしまいました。

ようやく怪我が治ってからも、同じミッドフィルダーのポジションに元西ドイツ代表のリトバルスキーがいたこともあり、試合に出場するチャンスはなかなかめぐってきません。その頃、婚約者との結婚が決まっています。華々しくJリーグが開幕したというのに、試合に出られなかった僕はとても焦っていました。うまくいかないことを他人や環境のせいにはかりしていて、かなり心がすさんでいたと思います。

そしてJリーグ開幕半年後の11月、よりに

よって結婚式の衣装合わせの前夜に自動車事故に遭遇。脊髄を損傷し、車いすの生活を余儀なくされることになってしまいました。

事故がきっかけとなった 新しい自分の始まり

事故が起こってからもしばらくの間は、まさか足が動かなくなるとは思ってもいませんでした。自分が車いすの生活となることを知ったのは、婚約者の希望にしがたって入院中に婚姻届けにサインをし、入籍を済ませた数週間後のことです。

自信満々のオレ様キャラで突き進んできた僕ですが、すべてをにかけて打ち込んだことが大好きなサッカーができなくなったことがわかった時は、人生のどん底。一人で絶望の真っ暗闇に落ちたような感覚でした。

そこから這い上がったのは、僕が歩けなくなることを知りながら結婚してくれて、献身的に付き添ってくれていた妻の存在のお陰です。「自分は一人じゃない」と気づいた瞬間、暗闇の中に光が指したような気持ちになり、「彼女を幸せにするために、少しでも早く社会復帰できるように頑張ろう!」と考えられるようになります。人の支えの有難さに気づいたのは、その時が初めてだと思えます。

以来、僕は、「自分のため」から「誰かのため」

高く思いどおりの連携プレーができるので、ものすごく刺激的で面白いサッカーができます。ところが、高校のチームに戻るとそうはいかない。年中、周囲にイラついては「なんでできないんだよ!」とチームメイトを責めていました。

当時の自分を表現すると、「わがまま、自己中、傲慢」。「オレが一番、オレより上手いやつはいない」といつも思っている典型的『オレ様キャラ』。今の自分が見たら、すぐにひびびたいような奴だったんですよ(笑)。

高校卒業後は、古河電工サッカー部(現ジェフユナイテッド市原・千葉)に入りましたが、そこでも相変わらずのオレ様ぶり。一番の新人だというのに先輩より先にシャワーを浴びて「何が悪い?」と思っていたような有り様で、



photo by Ken-ichiro Abe

**度肝を抜かれた
車いすバスケットボールの迫力**

千葉県には、「千葉ホークス」という全国屈

へ、「オレのお陰」から「相手のお陰」へ、「自分しか認めない」から「他人を認めよう」と考えるようになり、事故前とは真逆のタイプの人間に変わっていきました。

そして、妻を幸せにしたいという気持ちを原動力に、過酷なりハビリを頑張っている最中に知ったのが、車いすバスケットボールです。

指の車いすバスケットのチームがあります。

最初は、「強豪といっても、しょせんは障がい者のスポーツ」とあなどっていたのですが、紹介されて千葉ホークスの練習を見に行ってみると、あまりの迫力に度肝を抜かれました。

ご覧になったことのない人には、ぜひ一度観ていただきたいのですが、車いすバスケットは、パワー、スピード、テクニクのどれ一つとっても、皆さんの想像をはるかに超えるに違いないスポーツです。車いすを自在に操る技術や、攻守の切り替えの速さに加え、車いす同士のおつかり合いの激しさから「車いすの格闘

技」とも呼ばれています。

僕はプロのサッカー選手だったとはいえ、バスケットは体育の授業でやったことがある程度（笑）。始めてはみたものの、そうそう簡単に周囲のレベルに追い付けるはずがありません。練習に行くのもイヤで仕方なく、次第に足が遠のいていきました。

そんな姿を見かねたのか、ある時妻が「目標を高くもってやるなら、バスケット（自分の体に合わせて作る、自分専用のバスケット用車いす）を買ってあげる」と言い出しました。そしてバスケットが届いた頃から少しずつ車

略歴:1971年8月13日生まれ。北海道出身。89年室蘭大谷高校から90年古河電気工業(株)に入社。バルセロナ五輪の候補にも選ばれ、91年にジェフ市原とプロ契約。93年Jリーグ開幕半年後に、交通事故により脊髄損傷、車いす生活になる。リハビリの一環として始めた車いすバスケットボールでパラリンピック日本代表となり、2000年シドニー大会を皮切りにアテネ・北京・ロンドンと4大会連続出場。引退後の現在は、事故で奪われたサッカーを取り

いすバスケットが面白くなっていき、その後の結婚披露パーティーの時に、「パラリンピックを目指して頑張ります」なんて言ってしまったんです。

そんな場で公言してしまった手前、もう絶対後には引けなくなりました(笑)。

**努力は好きじゃないが
好きなことは頑張れる**

サッカー日本代表となる夢は事故と一緒に失いましたが、車いすバスケットボールで日の丸を背負ってパラリンピックに出るという新しい夢をもってからは、必死でトレーニングと練習に取り組みました。

そして事故から7年目の2000年についに日本代表選手に選ばれ、念願の日の丸を背負ってシドニーパラリンピックに出場。さらに2004年のアテネ、2008年の北京、2012年のロンドンと、4大会連続でパラリンピックへの出場を果たし、北京大会では選手団主将という大役も任せていただきました。

サッカー選手から車いすバスケットに転向した経緯をお話すると、いつも「せぞ努力なさったんでしょ」なんて言われるんですが、僕としては『努力』という言葉はピンとこないし、実はあまり好きではないんですよ。



講演活動やスポーツ教室など、学校や企業問わず様々な場所で自身の経験を伝えている

例えば、僕が苦手な勉強を頑張ったとしたらそれは間違いなく『努力』ですが、サッカーにしろ、車いすバスケットにしろ、自分で選んで好きでやっていることを頑張れるのは当然のことですから。

何か一つでも好きなことがあるというのは、人生でとても大事なことだと思っています。

**指導者として
再びピッチへ！**

夢や目標をもって好きなことを頑張っていれば、必ず、同じ夢を目指す人とのたくさんのお会いがあります。その出会いへの感謝の気持ちを忘れなければ、また新たな出会いが

訪れ、チャレンジの手助けをしてくれて、夢や目標の実現につながります。

だから僕は「夢・出会い・感謝」という3文字を特別思い入れのある言葉として大事にしている、色紙にサインする時はいつもこの言葉も書き添えているんですよ。

車いすバスケットを引退してからの僕の夢は二つあり、一つはどんだにいた僕に夢をくれて、成長させてくれた車いすバスケットをもっと普及させること。

もう一つは、サッカーの指導者としてピッチに戻ることです。無謀とも思える夢のようでしたが、昨年、城西国際大学サッカー部の外部コーチに就任し、サッカーの世界で再び闘うという目標を実現することができました。人気バスケット漫画「スラムダンク」の有名なセリフに「あきらめたらそこで試合終了」という言葉がありますが、本当にそのとおり。「夢・出会い・感謝」を忘れず行動することで、人生はもっと自由に変えていけることを伝えていければと思っています。

読者プレゼント

**サイン色紙
サイン入書籍**

抽選で6名様

詳細は、医師会インフォメーション
をご覧ください。

